

登山・登攀の記録

北アルプス 杓子尾根～杓子岳

日時:1957年12月28日 晴のち高曇、気温-8℃～7℃

メンバー:アタック隊-竹村義弘、大浦範行。

サポート隊-井筒喜世史、高田直樹、岡井作夫、木村勉、高橋尚子。

概要:春の劔岳で芝山努君が遭難し、同年夏までに数度の遺体捜索を行った直後であり、部活自粛ムードのなかで計画された冬山合宿中の記録。短いアプローチで冬山のリスクを避け、最大の登攀効果を狙った、即ち、ベースキャンプを猿倉小屋(村営の古い小屋)とし、前半は新人訓練を兼ねたラッセルサポート隊を杓子尾根に先行、後続のアタック隊が杓子岳を登攀。合宿後半は小日向ノコルにACを掛け、双子尾根から国境稜線に出て白馬岳をアタックする、二つの計画であった。

同年秋に白馬村役場で旧村営猿倉小屋の使用と修繕の許可を取り、秋の偵察(高田、角倉、竹村)で杓子尾根登攀の可能性を調べ、冬の12月25日に入山した。

積雪期の記録で、小日向のノコル 1826mから双子尾根～杓子岳登攀はあるが、猿倉 1280mから杓子尾根～杓子岳 2812mを日帰りで往復した登攀記録は見当たらない。

なお、1月3日早朝 長走沢で新雪雪崩が発生し高嶺山岳会(名古屋)会員4名がテントごと埋没、連絡を受け 直ちに救助隊を編成して捜索に当たったが まる2日を要し 合宿後半の計画を中止した。

合宿を終えて、帰路して間もない2月のはじめ、NHK 京都から出演の依頼を受けた。当時はまだラジオが主流だった。「冬山の楽しさ怖ろしさ」というタイトルの特別番組を組んだので、出演して冬山の雪崩遭難の救助や冬山の恐ろしさを生々しく語ってほしい、とのことだった。

番組には、京都府山岳連盟会長で、後のディラン隊の隊長となる小谷隆一氏も出演し、主に「楽しさ」を語る。西京大山岳部の二人は、「恐ろしさ」を生々しく語るはずであったが、竹村、高田は気がついたら楽しさばかりをしゃべっていたのである。

記録

サポート隊5名は、起床(1:30) BC猿倉小屋発(3:30)→猿倉台地の小日向への道を途中で右にトレースして長走沢を遡行、左岸のガレ場を過ぎたあたりから杓子支尾根に取り付く、ラッセルは膝上～腰下まで、新人のラッセル訓練を兼ね全員交代で→ 杓子支尾根稜線 1900mに到着(9:45)、ここでサポート隊の任務を果たし、アタック隊に登行を引継ぐ。

アタック隊2名は、BC発(6:10)→サポート隊のラッセルを伝ってサポート隊に追いつく(9:45)、ここで登行を交代、よって稜線 1900m地点まで楽をする(感謝)、→ジャンクション 2500m(12:20)→浮石が凍結した不安定な天狗菱を慎重に登攀→国境稜線の雪庇にステップを切り、杓子岳頂上に到達(13:40)。降雪の前触れか高曇りで気温下がる

→帰路は往路を下る、天狗菱ではザイルを使用
→ジャンクション(16:00)→BC猿倉小屋着(18:15)。

(記/竹村)

